

旧東ドイツスポーツ関係者の言説：  
自叙伝的著作(2001-2007年)の分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寶學, 淳郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43058">http://hdl.handle.net/2297/43058</a>

# 旧東ドイツスポーツ関係者の言説

— 自叙伝的著作（2001—2007年）の分析を中心に —

寶 學 淳 郎

The Discourse of the Persons concerned with former DDR-Sports

—Focus on the analysis of their autobiographic writings (2001-2007) —

HOUGAKU Atsurou

## 旧東ドイツスポーツ関係者の言説

— 自叙伝的著作（2001—2007年）の分析を中心に —

寶 學 淳 郎\*

The Discourse of the Persons concerned with former DDR-Sports  
— Focus on the analysis of their autobiographic writings (2001-2007) —

HOUGAKU Atsurou\*

### 1. 本稿の意図

ドイツ連邦共和国（以下、1990年以前は西ドイツ、以後はドイツと表記）では、1990年のドイツ再統一後、「ドイツ民主共和国（以下、東ドイツと表記）のスポーツとは何であったのか」「東ドイツスポーツを近代ドイツスポーツ史にどのように位置づけるのか」を明確にするために、東ドイツスポーツ史の再構成が企図されてきた。東ドイツ時代に書かれた教条主義的なスポーツ史叙述に対する懐疑があったからである<sup>1)</sup>。

再統一後間もなく資料集も出版されたが、史料的な限界のため、ソビエト統治期及び東ドイツにおけるスポーツの包括的あるいは詳細な像は示されないうでいた<sup>2)</sup>。1990年代後半になってようやく、ポツダム大学等を中心として進められた東ドイツスポーツ史に関する研究がまとまった成果として出された。その一つ旧西ドイツのG.シュピッツァー等によって編纂された『東ドイツスポーツの鍵となる文書：オリジナルな史料によるスポーツ史的概観』（1998年）は、東ドイツスポーツの発展について転換期を中心に跡づけ、その輪郭を明確に

するものであった。同著作では、伝統的なスポーツフェラインの禁止、党によるスポーツの支配、シュタージ、ドーピング、秘密裏の競技スポーツの助成、ディナモなどの分派、サッカーの偏重など、主に東ドイツスポーツのネガティブな側面に焦点が当てられている<sup>3)</sup>。その後、東ドイツスポーツ史を新しく如何なる形で叙述するかに関する論議が1999年に「スポーツの社会・現代史」誌に掲載されたW.ブス等の論文を巡って生じた。この論議の推移については、船井によって著されているので省略するが<sup>4)</sup>、この論議の焦点の一つは、東ドイツスポーツ史再構成への東ドイツスポーツ関係者の関与をどこまで認めるかであろう。このことは現代史研究における悩ましい問題であるが、今後の研究の方向性を見極めるためにも、我々は東ドイツスポーツ関係者の考えや主張を蔑ろにせず、また知る必要があるように思われる。

このような動向を意識しつつ、本研究は、再統一後東ドイツスポーツ関係者によって出された自叙伝的著作の分析を中心に<sup>5)</sup>、彼らが東ドイツスポーツ及びその周辺について語ろうとするものを検討するものである。これらについてC.ベッカー

は、旧東ドイツのスポーツマン、トレーナー、幹部、ジャーナリストが東ドイツスポーツの発展に関するその個人的見解を詳述したことは歓迎すべきことであり、それらは、時代の証言者へのインタビューとともに、純粋な公文書類の研究に対し(zum reinen Aktenstudium)、方法論上避けがたい修正を示したと述べる一方で、風当たりの強い当事者に対するインタビューを纏めた出版物については、主観的な証言もみられることを指摘している<sup>6)</sup>。国家崩壊後批判に晒された当事者による著作の取り扱いは注意を要するが、東ドイツ時代には語られることのなかった言説は、今後東ドイツスポーツ史を考える上で示唆を与えるものであろう。

一方、わが国では東ドイツスポーツ史研究は十分には進んでいない。例えば、ドイツ統合後の代表的文献である藤井政則の『スポーツの崩壊—旧東ドイツスポーツの悲劇』(1998年)は、東ドイツスポーツの歪んだ民主集中制やシュタージとの関係などを明らかにし、多くの示唆を与えるものであるが、これらの自叙伝的著作については触れていない<sup>7)</sup>。

わが国の研究状況も踏まえ、筆者は、先行する論稿においてドイツ再統一から1998年までに出版された旧東ドイツスポーツ関係者の代表的な自叙伝的著作5冊を取り上げ、これらの中で著者達が東ドイツスポーツ及びその周辺の何について多く論じているのか、それをどのように論じているのかを検討し、先行研究や同時期の研究との比較の上で、その特徴を明らかにした。同研究によって明らかになったことは、主に次のことである。①これらの中で、東ドイツスポーツに関連して多く述べられていることは、競技スポーツ、大衆スポーツ、ドイツ社会主義統一党 (Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、以下、SEDと表記)のスポーツへの干渉、自立性のないスポーツ組織、ソビエトの影響、スポーツと外交、ドーピング、シュタージ、サッカーの偏重、ステートアマ、メディアとスポーツ、国家崩壊とスポーツなどに関することである。②これらの個人的見解は東ドイ

ツ時代には語られなかったものや公文書などでは知り得ないものが多く貴重と言えるが、著者達の東ドイツ時代の職業や地位も反映され、類似、相違もみられる。③G.シュピッツァー等の著作と同様、これらにおいても、東ドイツスポーツのネガティブな側面について多くのことが語られているが、これらでは、東ドイツスポーツに対するネガティブな側面の強調、一面的理解、全般的否定に関しては多くの反論もみられる。④その他、東ドイツのスポーツシステムの独自性に関する叙述、第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの連続性を窺わせる叙述、スポーツの政策的意図と民衆のスポーツに対する意識の差異を窺わせる叙述もみられる<sup>8)</sup>。

旧東ドイツスポーツ関係者による自叙伝的著作は1999年以後も出版されている。我々はそれらにも目を向ける必要がある。東ドイツが消滅し20年以上を経た今、社会主義の模範と言われ、スポーツ分野でも世界の注目を集めた「東ドイツのスポーツとは何であったのか」という問題をネガティブな側面に偏らず冷静に分析できるチャンスが生み出されているように思われるからである。

これらの自叙伝的著作の分析は様々な側面から可能と思われるが<sup>9)</sup>、本稿では、1999年以後2007年までに旧東ドイツスポーツ関係者によって出版された自叙伝的著作の分析を中心に、彼らが東ドイツスポーツ及びその周辺について語ろうとするものを検討し、それを1998年以前の著作と比較したい。研究対象となる1999年以後の著作の選定については、現代ドイツスポーツ史研究を専門とするドイツのW.ブス、H.J.タイヒラー、そして旧東ドイツのG.ヴォンネベルガーの協力を得<sup>10)</sup>、後述する2001—2007年に出版された7冊の著作を選定した。なお、研究に際しては可能な限り著者達へのインタビューを試みた。現代史研究におけるインタビューの必要性を感じているからであり、インタビューを通じて著作の内容がより豊かに理解できると考えたからである。

## 2. 各著作の著者と概要

ここでは、研究対象となるそれぞれの著作の著者と概要について、簡単に述べておきたい。

① G.A.シュアー『テーフエ 自伝：グスタフ・アドルフ・シュアーがその人生を語る』（2001年）<sup>11)</sup>。同著作は、東ドイツスポーツ界最大のスター（自転車の名選手）であり、また、ドイツ統合後も含め長く政治活動（1958—1990年東ドイツ人民議会議員、1998—2002年ドイツ連邦議会議員）にも携わったG.A.シュアーがその70年の歳月を綴った自伝である。

② I.ガイベル『見失われた競技：あるドーピング訴訟日誌』（2001年）<sup>12)</sup>。同著作は、東ドイツの世界的な女子陸上リレー選手であった作家I.ガイベルが、東ドイツ女性アスリート達のドーピング訴訟及び結果をスケッチ、補完した書である。

③ H.ヘトリッヒ『スポーツ：私の大きな愛』（2004年）<sup>13)</sup>。同著作は、表舞台に出ることなく東ドイツで大衆スポーツに長く携わったスポーツ幹部H.ヘトリッヒがその人生とスポーツへのかかわりを綴った書である。

④ N.ロガルスキー『資格を付与されたが、不適格となる：私はどのようにドイツ体育大学を過ごしたのか？』（2005年）<sup>14)</sup>。同著作は、家具職人から出発し、ドイツ体育大学の労農学部で大学進学資格を取得し、大学へ進み、東ドイツのスポーツ科学に長く携わったN.ロガルスキーがその人生とドイツ体育大学の状況を綴った書である。

⑤ K.アンブラー『自転車のための私の人生：自伝』（2005年）<sup>15)</sup>。自転車の名選手K.アンブラーは、引退後ドイツ体育大学で学び資格を得、トレーナーとしても長く自転車競技にかかわり続けた。同著作では主に東ドイツ自転車競技の発展が跡づけられている。

⑥ K.U.フーン『私の第三の人生』（2007年）<sup>16)</sup>。東ドイツの政権政党であったSEDの機関紙“Neues Deutschland”紙のスポーツチーフであったK.U.フーンは、変革後、Spotless-Verlagという出版社を立ち上げ、自らも筆をとっている。同著

作では変革後のドイツの状況と彼の歩みが主に記されている。なお、K.U.フーンと後述するK.ウルリッヒは同一人物である。

⑦ H.レックナーゲル『姿勢の問題：思い出』（2007年）<sup>17)</sup>。スカンジナビア人以外で初めてスキージャンプ競技のオリンピック勝者（1960年のオリンピックスコール・バレー冬季大会）となったH.レックナーゲルは、通常の有名選手とは異なり、引退後は獣医として働く一方で、東ドイツNOC委員（1970—1990年）や国際審判として長くスポーツにもかかわり続けた。同著作は彼のスポーツへのかかわりを中心とした自伝である。

表-1は1990年から2007年までの主な自叙伝的著作の著者（生年）、著者の東ドイツ時代の主な職業、出版年、題名である。

スポーツ幹部、スポーツジャーナリスト、元女子選手によって著された1990年から1998年までの主な自叙伝的著作と比較すると<sup>18)-23)</sup>、この時期（2001—2007年）には、従来にない元男子選手（自転車、スキージャンプ）、大衆スポーツおよびスポーツ科学の専門家による著作がみられる（表-1参照）。

## 3. 東ドイツスポーツ及びその周辺に関する叙述

ここでは主に2001—2007年に出された自叙伝的著作において東ドイツスポーツ及びその周辺について多く述べられていることを項目別に整理し、1998年以前の著作と比較検討したい。

### (1) 競技スポーツ

1) 競技スポーツの諸相：世界で注目を集めた東ドイツの競技スポーツについて、従来の著作では、競技スポーツの画期、競技スポーツ促進の理由、競技力の向上をもたらしたものと阻害したもの、競技スポーツの問題などが述べられている。この時期の著作からは従来明らかにされていない東ドイツの自転車競技、スキージャンプ競技などの実態が窺える。なかでもG.A.シュアーがその経験から述べる自転車競技のスポーツ組織や選手

表1 1990-2007年までの旧東ドイツスポーツ関係者の主な自叙伝的著作

著者 (生年)	東ドイツ時代の主な職業	出版年	題 名
M. ザイフェルト (不明)	スポーツジャーナリスト	1990	東ドイツスポーツの名声と不幸：総括でないスポーツジャーナリスト40年のメモ
R. フクス/K. ウルリッヒ (1946/1928)	女子陸上選手/ スポーツジャーナリスト	1990	月桂樹と豊章：スポーツの驚き東ドイツの興隆と“没落”
M. エヴァルト (1926)	スポーツ界のトップ幹部	1994	私がスポーツであった：勝者が次々に生まれたおとぎの国の真実と伝説
K. ヴィット (1965)	女子スケート選手	1994	規定演技と自由演技の間の私の人生
H. F. エルテル (1927)	スポーツジャーナリスト	1997	最高の時：回想録
G. ゼイフェルト (1948)	女子スケート選手	1998	その時のお何かをなさねばならない：規定演技と自由演技以上の私の人生
G. A. シュアー (1931)	自転車選手	2001	テーフェ 自伝：グスタフ・アドルフ・シュアーがその人生を語る
I. ガイベル (1960)	女子陸上選手	2001	見失われた競技：あるドーピング訴訟日誌
H. ヘトリッヒ (1932)	大衆スポーツの幹部	2004	スポーツ：私の大きな愛
N. ロガルスキー (1935)	スポーツ科学者	2005	資格を付与されたが不適格となる：私はどのようにドイツ体育大学を過ごしたのか？
K. アンブラー (1940)	自転車選手	2005	自転車のための人生：自伝
K. U. フーン (1926)	スポーツジャーナリスト	2007	私の第3の人生
H. レックナーゲル (1937)	スキージャンプ選手	2007	姿勢の問題：思い出

選抜の様子、例えば、スポーツ共同体 (Sportgemeinschaft) の優れた選手を特定の職場スポーツ共同体 (Betriebssportgemeinschaft) に集め、周回自転車レースでは同じ業種の職場スポーツ共同体の選手を集めてスポーツ団体 (Sportvereinigung) として出場する、自転車競技の拠点を定める、優れた選手を学生としスポーツクラブ (Sportclub) に入れるなどからは、ソビエトのスポーツシステムを模倣したと考えられる東ドイツスポーツの初期段階の様子が従来よりも具体的に窺え、示唆的である<sup>24)</sup>。また、これらからは、実際にトレーニングや試合に携わった者しか知り得ない地道な取り組みや心情も窺える。

2) 競技力の向上をもたらしたものと阻害したもの：東ドイツ旋風と言われた東ドイツスポーツの急激な競技力向上の理由について、この時期の著作において従来になく述べられていることは、東ドイツにおける早期からのスポーツ医師の養成とその知識の一般医師への伝達、表彰・報酬制度、古い世代の経験の伝達、地域の運動指導者や職場スポーツ共同体のトレーナーの活動、W.ウルブリヒトによる積極的な冬季スポーツの促進などである。一方、競技力の向上を阻害したものとして、

従来になく述べられていることは、粗悪な国内製用具、気候の良い外国とは異なる国内の練習環境、海外での練習・試合の不足、選手に対する物質的刺激のなさ、トレーニング方法の停滞などである<sup>25)</sup>。

3) 競技スポーツの問題：競技力向上の一方で、従来の著作では、成果・記録主義への傾斜、秘密裏の競技スポーツの助成などが競技スポーツの問題とされていた。この時期の著作では、選手への過度の期待や圧力、オリンピックメキシコ夏季大会 (1968年) 及び E. ホーネッカー時代に生じた表彰や勲章の洪水なども問題として述べられている<sup>26)</sup>。

## (2) 大衆スポーツ

1) 大衆スポーツ軽視への反論：競技スポーツに対し従来から遅れが指摘されてきた東ドイツの大衆スポーツについて、従来の著作では、指導部の大衆スポーツ軽視、大衆スポーツを支えたもの、スパルタキアードの別の側面、大衆スポーツ軽視に対する反論などが述べられている。この時期の著作では、大衆スポーツ軽視については従来の著作ほど触れられていない。H.ヘトリッヒは、その

著作において、スポーツ共同体や職場スポーツ共同体におけるスポーツの組織化や活動を戦後間もなくからの自らの長い経験に基づいて具体的に述べ、そのような指摘は事実と異なると反論している。それに関連したインタビューにおいて、H.ヘトリッヒは、東ドイツのスポーツ共同体には自治体や企業など様々な形態があったことや、大きな企業のスポーツ共同体が財政的に豊かであり、東ドイツ崩壊寸前まで多くの種目で数多くの競技会を実施していたことなど、我々が今まであまり知ることのなかった事柄を語るとともに、職場スポーツ共同体が東ドイツ独自のものであることを強調した（2009年12月のインタビュー、於：ベルリン）。先のH.ヘトリッヒの大衆スポーツに関する叙述は従来ないものも多く、大変貴重と言えるが、注意を要する箇所もある。例えば、H.ヘトリッヒは東ドイツにおいて安い会費でヨットへの情熱を追求し、オリンピックで活躍する選手が出たことを述べているが<sup>27)</sup>、東ドイツにおいてどの種目でも誰もがこのような状況にあったと理解することは難しいように思われる。特に、1970年以後東ドイツでは促進するスポーツ種目が限定され、促進種目から外れた種目は衰微していったからである。

2) 大衆スポーツを支えたもの：東ドイツにおいて大衆スポーツを支えたものについて、H.ヘトリッヒは新しいスポーツ運動を支えたものは党中央委員会の決定ではなく、様々な人々の意志による活動であったと述べ、G.A.シュアアはボランティアの存在とそれを保障する制度をあげ、それを現代ドイツにおけるボランティア不足の状況と照らし合わせ、従来以上に繰り返し強調している<sup>28)</sup>。また、H.ヘトリッヒやK.アンブラーは、職場スポーツ共同体が競技スポーツと大衆スポーツの両面に重要な役割を担ったことを述べているが、従来このような役割に関する言及は少なく、東ドイツのスポーツ組織を解明する上で注目される。

3) スパルタキアードの別の側面：スパルタキアードが、オリンピックや世界選手権を目指す東ドイツのスポーツに才能のある若者のリハーサルとして重要な役割を果たしたことは周知のことで

あるが、G.A.シュアアはそれがタレント発見のためにあったのではなく、多くの青少年の参加と熱狂があり、住民の協力があつたこと、ピリアードなどオリンピック種目でない種目も参加者の提案で競技として行われた所もあつたことなどを述べている。このような別の側面については、1990年にM.ザイフェルトも述べているが<sup>29)</sup>、後者はこのような状況も少数の幹部の考えによって、沢山の参加者数より記録が重視されるように変化していったとも述べており、今後も検討が必要であろう。

### (3) 党のスポーツへの干渉とスポーツ組織の諸問題

1) スポーツの政治的利用：東ドイツは事実上一党独裁体制にあった。東ドイツにおける党のスポーツへの干渉とスポーツ組織の諸問題について、従来の著作では、党のスポーツへの干渉、スポーツ組織のヒエラルヒー、ドイツトゥルネン・スポーツ連合(Deutscher Turn- und Sportbund、以下、DTSBと表記)の問題などが述べられている。K.アンブラーやH.レックナーゲルなどは、従来の著作と同様に、党によるスポーツの政治的利用を厳しく批判している<sup>30)</sup>。一方、G.A.シュアアは、東ドイツのスポーツの政治的利用という批判に対し、西ドイツのスポーツの政治的利用を従来の著作以上に数多くあげ、反論している。

2) スポーツ組織のヒエラルヒー：長きにわたってDTSB会長の職にあり、党指導部とも結びついていたM.エヴァルトの権力と行為に対しては、従来の著作と同様に、H.レックナーゲルやK.アンブラーなども厳しく批判している<sup>31)</sup>。

3) DTSBの問題：従来の著作ではDTSBの自立性のなさ、幹部会の形骸化などが大衆団体であるDTSBの問題として述べられている。DTSB幹部でもあつたG.A.シュアアは、県の比較をする際、上への報告を気にして会員数などを無意味に操作していたことなどをDTSBの問題としてあげる一方で、DTSBがドーピング薬剤を配分した犯罪的組織と烙印を押されることに反対し、DTSBで働く人々は東ドイツスポーツの名声の基

礎を築くことに貢献したと述べている<sup>32)</sup>。

#### (4) ソビエトとの関係

1) 模倣と相違：スポーツ分野でのソビエトの影響と関係について、従来の著作では、占領権力とスポーツの政治化、模倣と相異などが述べられている。従来の著作には、ソビエトスポーツシステムの模倣について、東ドイツは他の社会主義国家より少なかったという叙述もみられるが<sup>33)</sup>、先に述べたように、G.A.シュアーの著作からはソビエトスポーツシステムを模倣したと考えられる東ドイツスポーツの初期段階の様子が従来よりも具体的に窺える。

2) ライバルとの交流：東ドイツの競技力向上によって、ソビエトと東ドイツの関係は友好からライバルへ変化したが、K.アンプラーの著作からは、そのような状況のもとでも両国が共に練習したことや情報・経験を交換しあったことなども窺える<sup>34)</sup>。

#### (5) スポーツと外交

1) ポーランド、チェコ・スロヴァキア、オーストリアなどとのスポーツ交流：スポーツと外交について、従来の著作では、東西両ドイツ間のスポーツ交流、国家的承認、強国への政治的依存などが述べられている。G.A.シュアーとK.アンプラーの著作では戦後ポーランドの提案で始まった平和レースの様子、そして、H.レックナーゲルの著作では戦後オーストリアの提案で始まったスキージャンプ週間の様子が従来よりも詳細に述べられるとともに、東ドイツスポーツが国際的に承認されるまでにこれらの競技会が果たした役割や政治的影響も述べられている<sup>35)</sup>。

2) 国家的承認を求めて：従来の著作では、東ドイツは国家的承認が拡大するまでスポーツ界においても承認されず、西側から多くの妨害を受けたことが述べられている。G.A.シュアーやH.レックナーゲルなども自らの体験からこのことに数多く言及している。H.レックナーゲルの表彰時における突然の西ドイツ国歌の演奏、西ドイツによる

アメリカ行きビザの発行拒否、アメリカによる東ドイツのトレーナーやジャーナリストの入国拒否などである<sup>36)</sup>。G.A.シュアーは、社会主義の拡大を恐れ東ドイツのスポーツによる出現も挫折させようとしていた西ドイツに対して、競技においてより優れたドイツ人を証明するしかなかったと述べている。

#### (6) ドーピング

1) ドーピングの実態：国家崩壊前からセンセーショナルに報じられていた東ドイツにおけるドーピングについて、従来の著作では、ドーピングの経緯と展開、ドーピング批判への反論などが述べられている。I.ガイペルは、その著作において2000年のドイツにおけるドーピング訴訟を描写しつつ、東ドイツの若い女性アスリート達（水泳選手、陸上選手）が何時何処で医学的説明なく薬剤を渡され、その後どのような後遺症に苦しんだのかを詳細に明らかにし、東ドイツスポーツ指導部の責任を追求している。この裁判は2000年7月に結審し、未成年の女性アスリートへのドーピングによる身体障害を142ケースにわたって幫助したという罪で、M.エヴァルトとスポーツ医療責任者であったM.ヘプナーは有罪（執行猶予付）となった。この訴訟ではこのようにスポーツ幹部の責任は明確となったが、訴訟者達に賠償金は支払われなかった。M.エヴァルトは刑に服することなく、2002年10月に病死した<sup>37)</sup>。

2) ドーピング批判への反論：一方、G.A.シュアーは、上述の裁判以後に出版されたその著作において、東ドイツ後期におけるドーピング薬剤の存在を認めつつも、無意識の服用やトレーニング段階における補助としての薬剤（支援的薬剤）使用の例を述べ、それがドーピングかどうかの判断は難しいと曖昧な叙述をしている。このような叙述は、1990年のK.U.ウルリッヒ等の著作や2004年のH.ヘトリッヒの著作にもみられる。また、G.A.シュアーは、党政治局の指示でメダルをとるためにドーピングが常習的に行われていたという批判に対して、信頼する価値のないものとし、上から

の指示による国家ぐるみのドーピングを否定するとともに、東ドイツのトレーナーほどトレーニング方法の改良に努めた者はなかったとその一面的理解に反論している。他方、K.U.フーンは、ドーピングが理由で東ドイツ出身の女子陸上選手に下された2年間の出場停止という国際陸上連盟の処分が不当であった事例をあげるとともに、その際ドイツで展開されたドーピングに関する報道の姿勢を批判している<sup>38)</sup>。

#### (7) シュタージとスポーツ

1) 早期からの監視：国家崩壊後、ドーピングと同様センセーショナルに報じられた東ドイツの秘密警察である国家保安省（シュタージ）によるスポーツの監視について、従来の著作では、スポーツ監視の実態、秘密裏の監視の徹底などが述べられている。K.アンブラーやH.レックナーゲルは、自らの経験から東ドイツのトップ・スポーツ選手が早い時期からシュタージに監視されていたことを述べている<sup>39)</sup>。一方、G.A.シュアーなどはこの問題について殆ど触れていない。

2) M.エヴァルトとシュタージ：M.エヴァルトは自身の著作において、シュタージによる秘密裏の徹底した監視を壁崩壊まで十分には知らなかったと述べているが、K.アンブラーは自らの体験から、スポーツ界のトップにいたM.エヴァルトとシュタージとのかかわりを仄めかしている<sup>40)</sup>。

3) シュタージ文書の信憑性：K.U.フーンは、ガウク機関に集められたシュタージ文書によって<sup>41)</sup>、再統一後多くの東ドイツ市民（スポーツ選手も含む）が不当な疑惑をかけられ、被害を被ったことを数多く記すとともに、シュタージ文書そのものの信憑性を疑問視し、それを歴史的史料として用いることなどに反対している<sup>42)</sup>。

#### (8) ステートアマとプロ

1) 国家による後援：ステートアマと称された東ドイツのスポーツについて、従来の著作では、国家的に援助されるアマチュア、報酬制度の形成、プロに対する認識の違いなどが述べられている。

H.レックナーゲルは自分がセミプロで純粋なアマチュアではなく、国家による後援があったと述べるとともに<sup>43)</sup>、現代のスキージャンパーの不安や現代のスポーツの問題にも触れている。観衆、ジャーナリスト、スポーツ幹部、政治家を満足させることができないのではないかとという不安、引退後の人生への不安、スポンサーによる束縛、メディアとスポンサーの大きな影響力などである。そして、H.レックナーゲルは、現代ドイツの著名なスキージャンパーであるS.ハンナバルトやM.シュミットの表情にはそのような不安が垣間見え、喜びが見えないとし、国家による後援に戻ることが望ましいのではないかとその考えを述べている。

2) 報酬制度の形成：従来の著作では、東ドイツのサッカー選手がプロであったことや、他の競技でも成果に対して報酬が支払われていたことが指摘されている。H.レックナーゲルは、1960年のオリンピック優勝の2ヵ月後に報酬を渡されたことを明らかにしている。このことは、1960年以前に既に東ドイツにおいて報酬制度があったことを窺わせる。一方、G.A.シュアーはその当時競技人生のピークにあったが、自らの報酬については語っていない。

3) 西側プロフェッショナリズムへの関心：自転車競技世界選手権のアマチュア優勝者はプロに転向するのが通例であったにもかかわらず、アマチュアに留まった理由について、G.A.シュアーは、お金を自由に使える以上に青少年の模範でいたかった、後悔していないと述べている。また、G.A.シュアーは、33歳で引退した理由について、その時すでに幾つかの仕事を持っていたからと、東ドイツにおける競技選手のセカンドキャリアの状況を述べている。一方、K.アンブラーは、東ドイツの自転車選手達に早い時期から西側プロフェッショナリズムへの関心があったことを従来よりも詳しく述べている<sup>44)</sup>。

#### (9) メディアとスポーツ

1) スポーツ幹部によるメディアの利用：東ドイツにおけるスポーツとメディアの関係について、

従来の著作では、指導部と密接な関係のあった少数のスポーツジャーナリストの存在、メディアによる記録や成果の賛美、メディアによるスポーツの支援、メディアの統制などが述べられている。H.レックナーゲルの著作からは、スポーツ幹部がメディアを利用して、H.レックナーゲルなど社会的影響力のあるスター選手の動きを抑えようとしていたことなども窺える<sup>45)</sup>。

#### (10) ドイツスポーツの歴史的連続性

1) スキー競技の歴史的連続性：H.レックナーゲルの著作には、17人のオリンピック選手を排出した彼の故郷ハーゼンタールについて、その歴史、地勢、古くからのノルウェーとのスキーを通じた特別な関係、そこで暮らす人々などが述べられている。これらからは、東ドイツスポーツと第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの歴史的連続性が窺える。このような歴史的連続性については、M.ザイフェルトも述べており<sup>46)</sup>、今後も注目していく必要があると思われる。「DDRの社会主義身体文化(＝スポーツ)が、その生い立ちから不可避免的に、実は『ロシア的』社会主義身体文化以外のもものではなかった」という評価の再考にもかわる問題であるからである<sup>47)</sup>。

#### (11) スポーツ科学

1) ドイツ体育大学の実態：東ドイツはスポーツ科学においても世界で注目を集めた。N.ロガスキーは、従来あまり語られることのなかった東ドイツにおけるスポーツ科学の拠点ドイツ体育大学について、初期の様子や、1970年代半ばから中央の諸決定に従うようになったことなどを自らのドイツ体育大学での長い経験に基づいて述べている。また、N.ロガスキーは、ドイツ体育大学が優れた能力を持ち、諸外国のスポーツにも寄与してきたにもかかわらず、再統一後その政治性のみで否定され、解体されたことを問題視している<sup>48)</sup>。

#### (12) 国家崩壊とスポーツ

1) 国家崩壊の影響：国家崩壊とスポーツに関

して、従来の著作では、指導者への批判、冷戦とドイツ分裂の影響、東ドイツスポーツに対する批判への反論などが述べられている。この時期の著作では、東ドイツの国家崩壊による個人への影響(失業、妬みなど)や、東ドイツスポーツへの影響(競技スポーツ、大衆スポーツの低下、組織の解体など)などについて、従来より多くのことが叙述されている。例えば、K.U.フーンは、ドイツ再統一後、西ドイツのスポーツジャーナリストがK.U.フーンをヨーロッパスポーツジャーナリスト協会幹部会から理由なく排除しようと画策したことなどを自らの経験から具体的に述べている<sup>49)</sup>。

2) 東ドイツスポーツ(史)に対する批判への反批判：ドイツ再統一後に書かれた東ドイツスポーツ史にかかわる誤った叙述や作為的内容、旧東ドイツスポーツ関係者やその著作を無視するようなドイツの状況などに対し、K.U.フーン、G.A.シュアー、H.ヘトリッヒ、N.ロガスキー、H.レックナーゲルは厳しく批判している。例えば、H.レックナーゲルは、ドイツ連邦議会が「ドイツにおける社会主義統一党の独裁の歴史の結果に関するアンケート調査」をしようとし、「以前の東ドイツにおけるスポーツの役割」についてH.レックナーゲルからも意見を聴取しようとした際、児童・青少年スポーツ学校にかかわるタレントの発掘やスポーツ共同体での大衆スポーツについて話したかったが、自由、政治的利用、シュタージなどからなるそのアンケートに作為性を感じ、さらに、これらの答えのみで東ドイツスポーツ史を描くことはできないのではないかという疑念から、その聴取に出向かなかったことを述べている<sup>50)</sup>。

東ドイツ崩壊後、そのスポーツは全般的に厳しい批判に晒された。このような批判には従来の著作においても多くの反論がみられる。K.ウルリッヒは東ドイツ史前半のプロセスすべてが誤りであったことは断じてないとし、ドイツスポーツ委員会などの設立には、後に西ドイツに移った者も含め多くの賛同があり、反ファシズムへの道が期待されたと述べ、H.F.エルテルは、第二次世界大戦後打ち拉がれていたドイツ国民を平和レースの活躍

によって勇気づけた G.A.シュアアの偉業への評価は東ドイツの崩壊によっても変わらないと述べ、R.フクスは、東ドイツの競技スポーツの良いところは残すべきと述べている。このことについて、G.A.シュアアは、東ドイツスポーツのポジティブな側面として、ボランティア活動、ボランティアを保障する制度、後継者育成の卓越した経験などを従来の著作以上に強調するとともに、東ドイツスポーツの一面的理解や全否定に対し、従来以上に強く繰り返し反論している。このような批判への反論は他の多くの著作にもみられる。

#### 4. 結びに代えて

ここでは、旧東ドイツスポーツ関係者の言説分析を通じて明らかになった語られた内容を纏めつつ、その特徴について若干言及しておきたい。

2001年から2007年までに旧東ドイツスポーツ関係者によって出された自叙伝的著作の中で、東ドイツスポーツに関連して多く述べられていることは、上述の(1)～(12)などに関することである。1998年以前の著作と比較すると、類似は多いが、この時期における大衆スポーツ、スポーツ科学に関する叙述の多さとサッカーの偏重に関する叙述の少なさが相違である。

1998年以前に出された著作と同様、この時期に出された著作における冷戦時代を生きた著者達による東ドイツの社会やスポーツに関する叙述は貴重と言える。実際のトレーニングや試合、政府関係者に近い者でしか知り得ない事柄、地方での大衆スポーツの状況などは、公文書などから知り得ないからである。ただ、その叙述には著者達の東ドイツ時代の職業や地位、ドイツ再統一後の立場なども反映され、類似、相異がみられる。再統一後も東ドイツと東ドイツスポーツを強く支持する立場にある G.A.シュアア、K.U.フーン、H.ヘトリッヒの著作すべてにおいて、先に述べた安い会費でヨットへの情熱を追求し、オリンピックで活躍する選手が出たという事例が取り上げられていることや、彼らのドーピングに関する叙述が類似

している点などを我々は注意深く読む必要がある。彼らのドーピングに関する叙述は、東ドイツのドーピングを徹底して糾弾し続けている I.ガイベルの叙述とは勿論異なる。

上述のことと関連するが、以前の著作と比較すると、この時期の著作では、I.ガイベルの著作を除くと、東ドイツスポーツのネガティブな側面への言及が少ないことや、東ドイツスポーツへの批判に対する反論が多いことが特徴である。こうした傾向には、再統一後のドイツにおける東西格差や心の壁、再統一後も続く東ドイツ、東ドイツ市民、東ドイツスポーツに対する不条理な扱い、そのような状況に対する旧東ドイツスポーツ関係者の姿勢なども反映しているように思われるが、推測の域を出ない<sup>51)</sup>。時をおいて出版されたその2冊の著作(1990年、2007年)にこのような傾向が端的にみてとれることについて、K.U.フーン自身は次のように語っている。「1990年の時点で、他の者と同様、私は東ドイツと東ドイツスポーツが何故滅んだのかわからなかった…東と西は兄弟と思っていたが、その後その関係は壊れた。さらに東ドイツがダメであると認識が流布された。最近ブランデルク市長は東ドイツ時代の良かったものまで潰してしまったと発言したが。このようなことから私は戦うことにした」(2010年11月のインタビュー、於：ベルリン)。

その他、先に述べたように、1998年以前と同様この時期の著作やインタビューにおいても、東ドイツスポーツの独自性や東ドイツスポーツと第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの連続性を窺わせる言説などもみられ、示唆的である。

2009年、M.クリューガーの講演論文「ドイツスポーツ60年」が「スポーツ科学」誌に掲載された<sup>52)</sup>。同論文において、M.クリューガーは第二次世界大戦後のドイツスポーツの状況を、分断国家すなわち西ドイツと東ドイツ間の対抗と緊張を軸に描こうとしているが<sup>53)</sup>、その二項対立的歴史像などに違和感を覚えるのは筆者のみではないであろう。我々がその評価以前にまず為すべきことは、「東ドイツスポーツとは何であったのか」を

明らかにするために、公文書類などの分析とともに、自叙伝的著作や時代の証言者の声にも耳を傾け、慎重に研究を進めることではなかろうか。旧東ドイツスポーツ関係者で亡くなった者や病院の床に伏している者も多いので、関係者へのインタビューについては急ぐ必要があると思われる。

(本稿の要旨については、スポーツ史学会第24回大会で口頭発表しているが、本稿はそれを研究資料としてまとめたものである)

### 注及び引用

- 1) 例えば次を参照。Bernett, Hajo, Prolegomena zur historischen Aufarbeitung des Systems von Sport und Körperkultur in der DDR, in: Stadion, 16(1990), S.1-36. 東ドイツの歴史学の問題については例えば次を参照。仲井斌、ドイツ史の終焉—東西ドイツの歴史と政治、早稲田大学出版部：東京、2003。
- 2) 例えば次を参照。Krüger, Michael, *Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und des Sports. Teil3: Leibesübungen im 20. Jahrhundert. Sport für alle*. Verlag Kark Hoffmann: Schorndorf, 1994.
- 3) Spitzer, Giseler/Teichler, Hans Joachim/Reinartz, Klaus (Hg.), *Schlüsseldokumente zum DDR-Sport: Ein sporthistorischer Überblick in Originalquellen*. Meyer & Meyer Verlag: Aachen, 1998.
- 4) 船井廣則、「歴史」としての東独スポーツ、スポーツ史研究、第18号(2005)、43-48頁。
- 5) ここで自伝ではなく自叙伝的著作と用語を用いているのは、これらには、「自ら書いた自分の伝記。自叙伝」以外のものも含まれているからである。
- 6) Buss, Woflgang/Becker, Christian (Hg.), *Der Sport in der SBZ und frühen DDR: Genese - Strukturen - Bedingungen*. Verlag Karl Hoffmann: Schorndorf, 2001, S.50-52.
- 7) わが国における現代ドイツスポーツ史研究の代表的な著作である高津勝の『現代ドイツスポーツ史研究序説』(1996年)では、ソビエト占領地区、東ドイツ、ドイツ統一にかかわるスポーツ史的事実が視野の外に置かれている。近年わが国において旧東ドイツのスポーツ関係者の自叙伝的著作にも注目したものとしては、次を参照。船井廣則、スポーツの現代史とその叙述について—旧東独のトップ・スポーツを例として—、船井廣則ほか編、スポーツ学の冒険、黎明書房：名古屋、2009、161-170頁。
- 8) 寶學淳郎、旧東ドイツスポーツ関係者が語る東ドイツスポーツ—自叙伝的著作(1990—1998年)の分析を中心に—、スポーツ史研究、第21号(2008)、43-55頁。
- 9) 自伝の分析方法については、例えば次を参照。東京大学教養学部歴史学部会編、史料学入門、岩波書店：東京、2006。
- 10) G.ヴォンネベルガーは1967年から1991年までドイツ体育大学に勤務した東ドイツの代表的なスポーツ史家であり、1971年から1983年まで国際スポーツ史学会会長を務めた。
- 11) Schur, Gustav-Adolf, *TÄVE, Die Autobiographie: Gustav-Adolf Schur erzählt sein Leben*. Das Neue Berlin: Berlin, 2001.
- 12) Geipel, Ines, *VERLORENE SPIELE: Journal eines Doping-Prozesses*. Transit Buchverlag: Berlin, 2001.
- 13) Hettrich, Hasso, *SPORT -MEINE GROSSE LIEBE*. Spotless-Verlag: Berlin, 2004.
- 14) Rogalski, Norbert, *Qualifiziert und ausgemustert: Wie ich die DHfK erlebte*. Vokal-Verlag: Leipzig, 2005.
- 15) Ampler, Klaus, *Mein Leben für den Radsport: AUTOBIOGRAPHIE*. Medien Service Gunkel & Creutzburg: Gotha, 2005.
- 16) Huhn, Klaus Ullrich, *Mein drittes Leben*. Spotless-Verlag: Berlin, 2007.
- 17) Recknagel, Helmut, *Eine Frage der Haltung: Erinnerungen*. Das Neue Berlin: Berlin, 2007.
- 18) Seifert, Manfred, *RUHM UND ELENDE DES*

- DDR-SPORTS: Keine Bilanz -Aufgeschriebenes aus 40 Jahren eines Sportjournalisten.* Verlag Bock & Kübler: Berlin, 1990.
- 19) Fuchs, Ruth/Ullrich, Klaus, *Lorbeerkrantz und Trauerflor: Aufstieg und "Untergang" des Sportwunders DDR.* Dietz Verlag: Berlin, 1990.
- 20) Ewald, Manfred, *Ich war der Sport: Wahrheiten und Legenden aus dem Wunderland der Sieger.* Elefanten Press: Berlin, 1994.
- 21) Witt, Katarina, *Meine Jahre zwischen Pflicht und Kür.* C.Bertelsmann Verlag: München, 1994.
- 22) Oertel, Heinz Florian, *Höchste Zeit: Erinnerungen.* Das Neue Berlin: Berlin, 1997.
- 23) Seyfert, Gaby, *Da muß noch was sein: Mein Leben - mehr als Pflicht und Kür.* Das Neue Berlin: Berlin, 1998.
- 24) Schur, a.a.O., S.27-100.戦後、社会主義が志向されたソビエト占領地区及び東ドイツではドイツに伝統的な地域性格の強いスポーツフェラインが禁止され、代わってスポーツ共同体が自治体や職場を拠点につくられた。1950年には多くの職場スポーツ共同体が集められ、労働組合の構成に基づいてスポーツ団体がつくられた。スポーツ組織の再編は1957年のDTSB設立までに続いたが、M.エヴァルトは、ドイツスポーツの伝統を考慮し、ソビエトのスポーツシステムの模倣は他の社会主義国家より少なかったと述べている。
- 25) Ampler, a.a.O., S.183. W.ウルブリヒト(1893-1973年)は、1950年から1971年までSED第一書記を務め、東ドイツの建国と初期の発展に中心的な役割を果たした。
- 26) Recknagel, a.a.O., S.177-198. E.ホーネッカー(1912-1994年)は、W.ウルブリヒトの後を襲いSED第一書記となり、東ドイツ国家崩壊寸前まで国家元首にとどまった。表彰や勲章の洪水について、H.レックナーゲルは、それによって過去のスポーツの成果が引き下げられると感じ、反発したと述べている。
- 27) Hettrich, a.a.O., S.54.
- 28) Schur, a.a.O., S.23.
- 29) Seifert, a.a.O., S.62.
- 30) 例えば、H.レックナーゲルのスキージャンプ週間3連覇という記録達成を阻むなど、政治的決定が個人の記録に直接影響を及ぼしたこともあった。
- 31) 例えば、H.レックナーゲルは選手引退後もM.エヴァルトに対して不安を感じたと述べ、M.エヴァルトを視野が狭いばかりでなく、執念深い人と評している。
- 32) Schur, a.a.O., S.155.
- 33) Ewald, a.a.O., S.37.
- 34) Ampler, a.a.O., S.219-222.
- 35) 平和レース(Friedensfahrt)最初のレースは、1948年に開かれ、1952年以後はワルシャワ、ベルリン、プラハを中心に開催された。冷戦期のレースは、東側のツール・ド・フランスとして知られ、人気を博した。一方、ジャンプ週間(Vierschanzentournee)は、毎年年末年始8日間集中してドイツとオーストリアで開催されるスキージャンプ大会である。1952-1953年シーズンから始まる歴史を有し、冷戦時代は、東ドイツのオーバーホフ、西ドイツのガルミッシュ・パルテンキルヘン、オーストリアのインスブルックとビショフスホーヘンを会場としていた。
- 36) Recknagel, a.a.O., S.116.
- 37) このような訴訟は以後もドイツにおいて続いている。2006年12月、旧東ドイツによる組織的ドーピングの犠牲になった元スポーツ選手167人が、後遺症による健康問題の保証金として、一人あたり約144万円受け取ることでドイツ当局との間で合意に達した。交換条件は、補償を受けた元選手は以後後遺症などに関する訴訟を起こさないことであった。
- 38) Huhn, a.a.O., S.96-99.
- 39) Ampler, a.a.O., S.55.
- 40) ebenda, S.55-60.
- 41) 1989年秋に東ドイツ各地で民主化を求める市民集会が発生したとき、先頭に立つ指導者の一人がJ.ガウクであった。統一後、彼は政府受託

機関で、シュタージが非公式協力者を使って集めた個人情報を調査検証する任務を委託された。2000名を越すその組織は、その複雑な名称から一般にガウク機関と呼ばれた。

- 42) Huhn, a.a.O., S.111.同著作にシュタージ文書の信憑性に関する叙述が多いことは、2005年にK.U.フーン自身にシュタージ疑惑がかけられたことと関連するように思われる。
- 43) Recknagel, a.a.O., S.91.
- 44) Ampler, a.a.O., S.47.
- 45) Recknagel, a.a.O., S.226-237.
- 46) Seifert, a.a.O., S.62.
- 47) 船井廣則、東ドイツのスポーツとはなんだのか、稲垣正浩・谷釜了正編、スポーツ史講義、大修館書店：東京、1995、120-124頁。
- 48) Rogalski, a.a.O., S.314.
- 49) Huhn, a.a.O., S.49-51.
- 50) Recknagel, a.a.O., S.191-195.
- 51) 東西ドイツの政治、経済、社会の統合は、予想を超える負担と困難をともなった。市場経済化と旧西ドイツ経済との一体化は、豊かな消費生活と生活水準の向上をもたらしたが、民営化によって多くの企業が閉鎖され、競争力のない企業の倒産も相次ぎ、1990年代半ばまでに東ドイツの就労者の約3分の1が職を失った。厳しい現実のなかで、当初の高揚した空気や連帯感の醒め、東西ドイツの市民の間には心の壁と言われる心理的な溝が生まれた。東の市民は自ら

が2級市民で西に植民地化されているという意識を抱き、東ドイツへの後ろ向きの郷愁が広がった。一方、西の市民も、統一がもたらした重い経済負担や東の人々の不平屋で恩知らずな態度に苛立ちを募らせた。対立の背後には、長期にわたる分断と異なる体制のもとで培われたメンタリティや行動様式の違いがあった。また、西と比べて東では社会主義の理念や旧東ドイツの社会に一定の価値を認め、東ドイツを不法国家として否定する見解には距離をおく傾向にあるなど、歴史意識のずれも東西間の心理的軋轢の要因となっている。1994年の連邦議会選挙では、SEDの後継政党である民主社会党が現実には失望する東ドイツ出身者の受け皿となり、1990年に引き続き議席を獲得した。2005年の選挙に際し、民主社会党は「労働と社会的公正のための選挙オルタナティブ」と政党連合「左翼党」を結成してのぞみ、54議席を獲得し、事実上第4党に躍り出ることになった。

- 52) Krüger, Michael, 60 Jahre Sport in Deutschland, Ein Essay zur deutschen-deutschen Sportgeschichte aus Anlass des 60. Geburtstags der Bundesrepublik, in: Sportwissenschaft, 39 (2009), S.237-250.
- 53) 同論文については例えば次を参照。有賀郁敏、ドイツにおける社会国家と余暇・スポーツに関する一考察—ミヒャエル・クルーガー論文に対する一つの応答—、立命館産業社会論集、第46巻第4号、2011、111-132頁。